

風姿花伝第一、年来稽古条々

二十四五

この頃、一期の芸能の定まる初なり。さる程に、稽古の堺なり。〔爰を三体の初とす。〕 声も已に直り、体も定まる時分なり。されば、此道に二分なり。果報あり。声と身形也。これ二はこの時分に定まる

〔口訳〕 此の時代は、一生の芸能の成否の定まる最初の時期である。従つて、稽古に最もはげむべき時代である。〔この時代を以て三体物真似の初の時期とする。〕今までの変声期の声もすっかり恢復し、体格も大人らしく定まる時分である。それで、此の道に於ける二つの良い事がある。それは、声と身なりとで、この二つは此の時代にはつきりときまるのである。そして年盛りに適合するやうな良い芸能の生れる時である。かやうな次第で、他人が見ても、「素敵だ、上手な者があらはれた」

也。歳^{とし}盛^{さか}りにむかふ芸能の
生ずる所也。さる程に、外^{よそ}
目にも、すは上手出来たり
とて、人も目にたつる也。
本^{もと}名人^{めいじん}なんどなれども、当^{たう}
座^ざの花に珍^{めづ}らしくして、立^あ合^あ
い勝負^{しやうぶ}にも一旦^{たん}勝^かつ時は、

といつて、世人も特に注目する。又、
元来相当な名人を相手に競演をやつ
ても、この青年の美花（これは一時的
な花にすぎないが）の珍らしさに見物
が喝采して、競演に勝つ事もある。さ
うなると世人も立派な者だと感服し、
青年自身も、自分は上手だと自惚れ
はじめる。しかし、これは返す返すも、
当人にとつて非常な害をなすものであ
る。かやうな花も、真の花ではなく、
ただ年齢の盛りであるといふ事と、見
る人が、一時的に珍らしく面白く感じ
るといふことに過ぎない。真に眼識の

人思^あ上^あげ、主^{ぬし}も上手と思^{おも}始^{はじ}
むるなり。これ返^{かへ}々^{ずく}主^{ぬし}の為^{ため}
仇^{あだ}なり。これも誠の花には
非^{あら}ず。年^{とし}の盛^{さか}りと、見る
人の一旦心の珍^{めづ}らしき花なり。
真^{まこと}の目利^ききは見^わ分^わくべし。
この頃の花こそ、初^{しよ}心^{しん}と申^{まうす}

ある批判者は、これが一時の花だとい
ふ事は見分けるであらう。

此の時代の花などといふものは、初

比^{ころ}なるを、極^{きはめ}たるやうに主^{ぬし}
の思^{おも}て、早^{はや}申^{まを}樂^がに側^{そば}見^みたる
りむぜつを為^し、至^{いた}りたる風
体^{てい}をする事、あさましき事
なり。仮^{たと}令^ひ人も賞^ほめ、名人^{めいじん}
なんどに勝^{かつ}とも、これは、
一旦^{たんめづら}珍^{めづ}しき花^{はな}なりと思^{おも}ひ悟^{さと}

心といふべき頃のものであるのに、当
人は早や芸道の至極をきはめたかの如
く考へ、はやくも、猿樂の本道に外れ
た偏見を主張したり、大成した名人の
やうな風体をしたりするのは、実に浅
ましい限りである。たとひ世人から賞
められ、又名人などに勝つ事があつて
も、これは珍らしさといふものが主と
なつた一時の花だと思ひ悟つて、愈々
物真似なども正格に稽古し、尚、その
道の達人に細かに教を乞うて、益々稽
古に熱中しなければならぬ。以上申
した通りであるから、一時的な花を、

りて、いよく物真^ま似^ねをも
直^{すぐ}に為^し定め、尚^{なを}得^えたらん人
に事^{こと}を細^{こま}かに問^とひて、稽^{けい}古^こを
弥^い増^ましてすべし。されば、
時分^{ときぶん}の花^{はな}を、真^{まこと}の花とする
心^{こころ}が、真実^{まこと}の花に尚^{なを}遠^{とほ}ざか
る心なり。たゞ人毎^{ごごと}に、こ

真の花の如くに誤認する心が、真実の
花からいよいよ遠ざからしめる心なの
だ。ただ誰でもが、この一時的な花に
迷つて、そんな花などは直ぐに失せて
しまふことも知らずにゐる。初心とい
ふのは此の時代のことだ。十分に思慮
をつくし考へて見るべきところである。
自分の芸位の程度を十分にわきまへて
居るならば、その程度の花は一生なく
なるものではない。自己の実際の芸位
より以上の者である如く慢心して居る
と、元来あつた花までも亡びてしまふ。
よくよくこの事を心得ねばならない。

の時分の花に迷^{まよひ}て、即^{やが}て花
の失^うするをも知^しらず。初心
と申はこの比^{ころ}の事なり。一
公案^{こうあん}して思ふべし。我位^{くら}の
程を能^{よく}々心得^えぬれば、それ
程の花は一期^{いちご}失^うせず。位よ
り上^{うへ}の上手と思^{おも}へば、本^{もと}あ

りつる位^{くら}の花も失^うする也。
よくく心得^うべし。

〔評〕

十七八の失意時代が過ぎて、廿四五歳の得意時代がやつて来る。前
代に苦痛の種となつた声・姿が、此の時代にはすべて良くなり、物真似
芸も手に入つて、演ずる所は諸人に賞讃され、時には、名人と言はれ
た人と競演してもこれに勝つといふ、実に得意の絶頂である。しかし、
ここに萌すものは慢心と自負心である。即ち此の時代の花は、一時の花

に過ぎないものであるのに、それを真の花の如くに思ひ込んでしまふ。一かどの名人気取りで、自分の芸位より遙かに上のものと思ひ、至つた風体をしたり、本道を外れたやうな主張をやつたりする。これが此の時代の最も危険な所である。年若くして喝采せられた者が、その後進歩しないといふのは、この一時の花に酔ひ痴れる為である。見やうによれば、十七八の危険時代以上の危険時代とも言ひ得るであらう。

その危険さを脱するのは、やはり自己反省である。一時の珍らしさにもてはやされてゐるに過ぎないと悟ること、正格な物真似をしつか

りやる事、自分よりも上位の人に事をとひ批評を求めること、これが、この危機を脱する方途である。正しい自己認識が出来れば、この危さは克服し得るのである。

これ必ずしも猿樂に限らぬ現象。諸芸に互り何れもこれがある。新進としてもてはやされて、それで進歩がとまり下落の道をたどる例は、あまりにも多く、且つ痛ましい限りである。

欠ページ補填…同書別版